

---

# 江戸嬢人情物語 50音順小説Part ~え~

黒やま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

江戸嬢人情物語

50音順小説Part1～え～

### 【NZコード】

N8403X

### 【作者名】

黒やま

### 【あらすじ】

50音順小説Part1～え～です。

題名と主人公の名前と最初の文章の一文字を「え」ではじめてみました。

(前書き)

時代小説に初挑戦。

任侠ものです。

江戸 現在は東京と呼ばれる首都であり、昔は徳川幕府が置かれた  
政の中心地。

そんな江戸時代に極道一家の一人娘として生まれ育ったお嬢様とお世話役の組の子分のちよつとした騒動のおはなし。

「お嬢――…ビリーリーりしゃるんですかー…」

むなしく己が声が響くだけで返事はない。

いつものことだが毎回これでは私の身が持たない。

全く…あのじゅじゅ馬娘は一体ビリーリーといったのだが。

私の名前は榎本志郎。通称工ノ。

我が山吹組組長の娘、美子さまのお世話役として日々奮闘している。

山吹組とは城下町である永楽町を取り仕切っている極道一家で

『泣く子もだまる山吹組』としてここいらでは有名である。

そんな組の頂点に立つ人の大事な一人娘の身の回りの面倒を任せているのが私。

美子さまのお世話役として働くのは大変光栄なのだが、ほとんど面倒を見ているといふか遊ばれているのが実情。

美子さまをさがしている途中で冗談分である緒方さんと富樫さんに出会った。

緒方さんと富樫さんは山吹組の一大巨頭で一人して筆頭若頭だ。

「おい、エノ。またお嬢どつか行つしまつたのか。」

と緒方さんに訊かれたので、

「はい。緒方さんと富樫さん、お嬢見ませんでしたか？」

すると何か書き物をしていた富樫さんが、

「お嬢なら裏口の方へこなしてお行きになつたぜ。」

それを聞いてピンッと来た。

美子さまは町に出るときは必ずお供の付添がなければならぬ。

ひとりで町に行つたのなら行き先はあそこしかない。

私は一人に礼を言い急いで門を飛び出した。

十数分後、私は永楽町のはずれにある一軒のオンボロ道場にたどりついた。

中からは子供たちのにぎやかな声が聞こえてくる。

門をくぐり中に入ると道場の主と田が合ひた。

「やあ田さんやろそろ来ると思つていたんだ。美子さんなら桜の木のところにいるよ。」

優しそうな顔をした田の主、藤堂信介じゅうじょうしんすけは

竹刀を片手に門下生の稽古をつけていた様子だ。今は休憩中なのだ

る。

「いつもお嬢が・・・お嬢様が迷惑をかけてすまない。藤堂さん。」

藤堂さんには美子をまはさる名家の一人娘と偽つてちょくちょくここに遊びに来ている。

もちろん山吹組の関係者、しかも組長の娘だなんて知られたら大変だからだ。

「いやいや、迷惑なんてとんでもない。むしろ子供たちの面倒を見

てもらつて助かつてゐるよ。」

申し訳ない気持ちで「つぱい」の私に藤堂さんは

美子さまのお世話役として非常に嬉しい言葉をかけてくれた。

藤堂さんはこの道場で親を「くして行き場のない子を拾つては

一緒に暮らしている奇麗な人だ。

だが先に述べたようにここはオンボロ道場で金なんてほとんど無いに等しい。

門下生の数も少なくみな家庭に余裕がない子ばかり、聞くといふと月謝もほとんど受け取らずに

指導してくるらしい。

藤堂さんが教えてくれた場所へ行くと美子さまは桜の花びらが舞つなか立つていた。

美子さまはその名の通りの容姿でその姿はまるで桜の精をみているかのようである。

大人しくしていれば完璧なのに・・・。

これは常々私が思つことだ。

そんなことを考えていたら「さうに気付いたのか美子さまが振り返つた。

「遅いわよ、エノ。待ちくたびれたわ。」

軽やかな声で私の名を呼んだ美子さまはとても楽しそうな表情をしていた。

「お嬢・・・。あのですね、毎回おまつりおりますがこの「」ことが組長に知られたらどうなることか。」

「大丈夫よ、バレやしないわ。」

私の心配を尻目に美子さまは雑巾を投げてよこしてきた。

「はい、エノは床拭きお願い。」

そう言つと美子さまは子供たちに呼ばれあつという間に消えてしまった。

美子さまがこの道場に通い始めて早二ヶ月、きっかけは組長と喧嘩して家出した美子さまが

不逞の輩に絡まれていた というか美子さまから喧嘩を吹っかけたのが原因なんだが

といひを助けてくれたのが藤堂さんだったといつわけだ。

しかしその恩返しで三ヶ月も道場に来て子供たちの世話をするほど美子さまはお人好しではない。

そう、目的は藤堂さん。

美子さまは彼にほの字なのだ。

藤堂さんと話していく時の美子さまとこつたら周りに花が飛んでる。

あんな美子さま見たことがない。

わちわらん美子さまの恋を応援したいのは山々だが、極道の娘ヒオンボロ道場の武士とでは

明らかに釣り合わない。

感情が一時のものなら構わないんだが・・・。

とんだけじや馬だけども今の彼女は恋する乙女。

まあ、美子さまが幸せなら今はそれでいいか。

そんなある日のことだった。

「ああ～つまんない。退屈。」

足を放り出して畳の上に大の字になる美子さま。

相変わらずの下品な行為、何とならないものか。

「お嬢、はしたないですよ。」

私の注意など聞かず仰向けて着物が乱れたまま大きな欠伸をひとつする。

「だつてしばらくは出かけちやいけないだなんて退屈すぎるわ。お父様のあんぽんたん。」

「仕方ないですよ。この頃の永楽町は物騒なんです。」

「この最近の永楽町は怪しげな奴らが増えてきている。」

噂によると山吹組に取つて代わろうとしている新興勢力が台頭してきているとのことだ。

そんな危ないところに愛娘をほつき歩かせるわけにはいかない。普段は皆から恐れられている組長とはいえ、やはり一端の父親なのだと改めて思つ。

「もう一ヶ月も道場に行けてない……。」

ぽつりとつぶやいた美子さまの独り言。

「藤堂さんにそんなに会いたいですか?」

すると美子さまは急にガバッと起き頬を紅潮させて

「なつ……別に藤堂さんに会いたいわけじゃなくて、いや、会いたいけど。」

だからつて特別会いたいとかではなくて……。そう一・道場のみん

なに会いたいの？」「

しどりもどりになりながら言い訳をはじめた。

いつも遊ばれているお返しのつもりで少し意地悪をして気分が晴れた。

「はいはい。分かりました。さつともうすぐ会えますよ、道場のみなさん！」

あえて後ろの口調を強くして言つと、美子さまは顔を赤らめたまゝこひらを睨みつけた。

「馬鹿。」

美子さまは仰向けからひつ伏せに体勢を変えるとそのまま向も蝶ちなくなつた。

「どうやらふくれてしまつたよつだ。」

「失礼致します。」

スッと襖を開けた声の主は緒方さんだ。

「お嬢、お寢起きのところお邪魔してすいません。エノちよつと。」

呼ばれた私は美子さまを残し廊下に出た。

「どうしたんですか？」

緒方さんは難しい顔をして

「今報告が入ったんだが、この前いつてた新興勢力が動いた。どうやら町はずれのあのオンボロ道場があるあたりで怪しげな動きをしているらしい。」

「え？・・・。それは本当ですか？」

「どうもやうらじい。まず手始めに町の端から狙つてこくつもりなんだらう。」

藤堂さんが危ない。美子さまがこれを見つたら・・・

「どうあえずまた後で報告するから。お嬢をしつかりみてろよ。」

そう言いながら緒方さんが襖を開けると部屋はもぬけのからだつた。

まずいつ！今の話を聞かれていたのか。

「緒方さん！お嬢を助けにいかないと！――」

緒方さんは何のことをぱり分からぬといつた顔をしていたが私が必死な形相なのを見てとにかく美子さまの危機だといつこと察してくれた。

「お嬢は道場に行つたんです！今そこにに行つたら危ない。」

「分かった。とにかくお前は先に行け、俺は富樫たちに知らせてくる。」

私は額き刀を握りしめ表へ飛び出した。

やつとの思いでたどり着くと道場はオンボロじろか廢墟になっていた。

急いで門をくぐった途端聞き覚えのある威勢のいい声がした。一步遅かつたか。

中では藤堂さんと子供たちを庇つ形で美子さまが立っていた。向かい側には刀を持つた男たちが十数人、みなじりつけのような風貌をしてくる。

藤堂さんは重傷を負つているらしい。ひどい出血だ。

一刻もはやく医師にみせなくては命の危険がある。

「やめなさい！あなたたちね、今永楽町をウロチョロしていい鼠つていうのは。

悪いことは言わないわ。やつたといの町を出でにきなさい。やついたら見逃してあげる。」

相手を挑発するようなことを言つてやつするんだと思つて、

私は素早く美子さまのもとに走つて前に出た。

「エノフ……。」

表情は見えないが美子さまが驚いているのが声で分かつた。

向こう側も同様にいきなりあらわれた私にさわついたが一人の男が手を挙げると静かになつた。

その男が前に一步踏み出した。左頬に刀傷があり相当な手練れにみえる、こいつが頭か。

「鼠とは酷い言いようだねえ。つてことはさじづめお嬢ちゃんは鼠を狩る猫つてとこかい。」

くくくと笑うと傷の男は美子さまを踏みにするような目でみつけて言った。

「そうだな。そつしてもいいが条件がある。」

「何よ。」

傷の男の次の言葉に私は耳を疑つた。

「お嬢ちゃんが俺の女になるんなら、この町から手を引いてもいいぜ。」

言われた本人もそんなことを言われるとは思つてなかつたらしい。

「そんな条件飲むわけないだろ。」

美子さまの代わりに私が答える。

「なんだあお前は。俺はそつちのお嬢ちゃんに聞いてるんだ。てめえは引っ込んでな。」

傷の男が目配せすると一人の男がいきなり私に切りかかってきた。

だが力は私の方が上であり簡単にその男を難ぎ払つた。

それを見ていた傷の男は驚いた様子で、

「おめえ、只者じゃねえな。まさか・・・。」

山吹組の者だと感づかれたが、ここにで素性がばれると美子さまが・・・

・

「そうよ、あなたが思つている通り。」

すぐ後ろから声がした。

「こいつは山吹組の舎弟で私の世話役。」

山吹組といつも山吹組のせいであちこちが一気に騒ぎ始めた。

「やはり山吹組だったのか。つてことはお前さんは・・・。」

傷の男は美子さまを見た。

「私は山吹組三代目組長山吹八重蔵の娘、山吹美子。」

私は目を丸くさせて振り返った。

「「！」まで来たら仕方がないわ。」

懐から護身刀を取り出し構える美子さまは吹っ切れた表情をしていた。

「やるわよ、エノ。」

「おっお嬢！ いくらお嬢に剣術の心得があつても奴等と戦わせるわけにはいきません！」

「何ぬかしてるのよ。この状況でそんなこと言つてゐる場合じゃないでしょ。」

相手は刀を持つた男たち十数人に対してもこちらは重傷者と子供たちを抱え動けるのは一人だけ。

まさしく多勢に無勢である。

さすがにこの人数を一人で相手にするのは無理だ。しかし、美子さまにもしものことがあれば。

「都合がいいじゃねえか。この際組長の娘を殺すとしよう。」

傷の男を合図に男たちが動き始めた。その時

「おいおい。うちのお嬢に手え出そだなんて随分となめた真似してくれるじゃねえか。」

声のした方向には緒方さん、富樫さんたち総勢二十人以上がいた。

「ハハハおめでら全員始末してやるよ。」

富樫さんの一声で一斉に飛び出す。

さすが天下の山吹組、ものの数分で片づけてしまった。

あの傷の男も剣術では右に出る者はいないといわれている富樫さんに

かかればいともたやすく倒されてしまった。

「緒方さん、富樫さん、ありがとうございます。助かりました。」

「いいいひとよ。お嬢のためなんだからよ。」

刃こぼれがないか確認しながら富樫さんは言つ。

「やういえばお嬢は？」

緒方さんの問いにハツとする。

「お嬢は・・・そのお取込み中といいますか。とりあえず大丈夫なんで先に帰つていてください。」

お嬢が藤堂さんを抱いで医師のところまで走つていったなんて言えるはずがない。

みんなが帰つた後子供たちはまだ怯えていた。

それはあの『泣く子もだまる山吹組』のせこである。

「い」みんな。今まで黙つて。」

子供たちからの返事はなく私は「それだけあればじまへりは生活できるであるひづきを置いて

その場を去つた。

医師のもとを訪ねる頃には薄暗くなつていた。

美子さまは藤堂さんの看護をしていた。

私が来たのに気づき笑つ。

「[安靜にしてればすぐ良くなるそつよ。]」

美子さまの顔を行灯が優しく照らす。

「お嬢、あれでよしかったのですか。」

「いいのよ。別に、そのひづきてしまつてだったんだから。」

そうこつて腰を上げる。

「わあ、暗くなつてきたし帰つましょ。」

美子さまが口に向かいかけた時藤堂さんが田原めた。

「美子さん、エノさん。」

思つたよりしつかりした口調で話しかけてきた藤堂さんの枕元に美子さまが駆け寄つた。

「藤堂さん、話して大丈夫なの?」

「これしきの」と平氣です。」

「そう、よかつた。」

その後氣まずい沈黙が流れる。

「美子さん、僕は知つてましたよ。貴女が山吹組の組長の娘さんだとこりゃ」と。

「貴女と会つ以前に一回見たことがあるんですよ。その時美子さんはいじめつ子を木の棒を振り回して追いかけていたところでした。」

「ふふつ。」

笑いが堪えきれず思わず吹いてしまつた。

瞬時に裏拳を打ち込まれる。

「いじめられてた子を助けてた貴女は凛として美しかつた。」

その時の風景を思い出しているのか瞼を閉じている。

「貴女はとても優しい人だ。極道の娘とか関係ない、だから敢えて言わないでいたんですね。」

ふと田を開け藤堂さんは美子さまを真っ直ぐ見つめる。

「もしよろしかつたらこれからも道場のお手伝いお願いできますか？」

思いもよらなかつた言葉をかけられ驚く美子さま。

けれども答えは決まつていた。

「はい。喜んで。」

美子さまの恋が成就するかどうかはわからないが私にできる限りのことなら何でもするつもりだ。

何故つて？

それは私が美子さまのお世話役だからに決まつている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8403x/>

江戸嬢人情物語 50音順小説Part～え～

2011年11月10日23時50分発行